

## 意志の力ですつきり

暮らしたい・・・

### 藍綬褒章を受章して

NPO 芦安ファンクラブ 副会長

塩沢 久仙

昨年の九月中旬に横内知事から「藍綬褒章」受章の連絡をいただきましたが、あまりにも唐突で、とても信じられず、思わず「私にですか？」と聞いてしまいました。

内容は「多年にわたり、自然公園指導員として、南アルプス国立公園を中心に、動植物の保護、利用者の指導、美化清掃活動等に尽力し、自然保護思想の普及啓発に貢献したこと」が、その理由で、関係省庁は環境省、窓口は県みどり自然課で担当して下さることになりました。

思い起こせば、中学生の頃から山登りを始め、たくさん山の山に登っているうちに「山に係わって生涯を送りたい」と思うようになりました。縁あって当時頻繁に通っていた南アルプスの夜叉神峠小屋での山の生活が始まりました。当然の事ながら、登山者としてのそれまでとは逆に、受け入れる側の人間として、大勢の登山者と接することとなり、山小屋の業務を遂行してゆくのは、営業小屋として対価に見合ったサービスを提供してゆくこと。山岳気象、動植物等の自然科学や山に係わる歴史文化の会得等：のことを学ばなければなりません。取り組み始めて気

付いたことですが、これらのものは途方もなく深く、大きいもので、とても私の一生では学びきれぬほどのものではないかもしれません。そのように偉大な山々は、古来より私たち人間にさまざまな恵みを与え続けてくれています。そして最前線にいる私こそが、他の誰よりも、その恩恵に浴していることに気がついたとき、「この自然を大事にして少しでも恩返しをしてゆきたい」と思うようになるのに、それほどの時間は必要ありませんでした。

志を同じくする仲間たちや先輩諸氏と共に、現場で地道に自然保護活動を展開してきました。しかし、その歩みは遅くゆるやかで、四十数年が過ぎた今でも、たくさんさんの克服しなければならぬ課題が山積していますし、時間の経過と共に生態系の変化等の新たな問題も生じてきています。たとえば、私の個人的な自然保護活動が絶滅しかけた動植物の「ある種」を救ったごときの快挙であれば、胸を張って受章できるのですが、...そんなこともないのに、何か気恥ずかしい思いがしてなりません。

しかし、この褒章が、私だけでなく前記のような大勢の仲間たちと共同の成果だと考え榮譽に浴することにいたしました。

十月下旬、報道関係者には一足早く発表され、山梨県ではこの分野での受章が珍しいことから報道各社から取材を受け、十一月二日に新聞、テレビ等で報道されると、たくさんの人々から電話、手紙、電報等により祝福され、改めて今回の受章の重みを知らされました。



山岳自然環境を守る活動は、小さな人間一人では到底出来るものではなく、今日まで山が私に与えてくれ、私のかげがえのない財産となっている大勢の

十一月十六日、私たち夫婦は慣れない礼服を着用して鴨下環境大臣より、本年度の環境省関係受章者八名と共に、褒章の記と褒章を拝受し、記念撮影の後、皇居に行つて参りました。

この日は、私の人生の中でも、昭和六十二年十一月二日の北岳バットレス四尾根で起こった遭難救助事件と共に最も長い一日であったような気がしました。

伝達式が終わつてからも友人、知人たちからの祝意が届き、常日頃お世話になつていらっしゃる方々や、日本高山植物保護協会、山岳写真の会「白い峰」それに芦安ファンクラブの有志の皆様が發起人となり、本年一月十九日に二百数十人が駆けつけてくださり、甲府「富士屋ホテル」で盛大な祝賀会を開催していただきました。この祝賀会ではファンクラブの皆様にも一方ならぬお世話をいただき感謝の気持ちで一杯です。

この受章を機に、これからも健康に気をつけながら、お世話いただいた皆様や山々のために、しっかりとした目的を持って、余分な物を持たず、求めず、広げすぎた生活を小さく畳んで、意志の力ですつきりと爽やかに生きてゆきたいと考えております。今後とも変らぬご指導をお願い申し上げます。

「塩沢さん、藍綬褒章授章ほんとおめでとつてございました。長い間の地道な活動が認められてよかったですね」

NPO 法人芦安ファンクラブ 同



登山道整備あれこれ

夏山シーズンも終わり、艶やかな紅葉も色あせると、なぜかいつも里山の事が気になってくる。

今年秋の中頃から百太郎さんがこつこつと夜叉神旧道の草刈をしてきていた。草刈機や大鎌を使って汗をかき、その後、古屋敷の山溪園でその汗を流している姿を何度か見かけることがあった。「皆が高い所で頑張っているから俺も何か手伝わんと」その気持ちを八十三歳で持ってくれているからありがたい。十一月の定例会で旧道の標識不備や、木製階段の荒廃を整備しようとの意見が出た。

併せて、崩壊している一部の危険箇所は民地の地権者に承諾を得て高巻きさせてもらおうとの話が進んだ。



愉快的な笹刈隊、賑やかに出発



仕上げは念入りに！

十二月二日の作業日を予定し、その情報をHP掲示板で流したところ、「ぜひ参加させて欲しい、草刈機を持参で押しかけたい」と、南アルプスの南、大井川流域の住人、東海フォレストの武村さんが強いエールを送ってくれた。驚き嬉しい気分が準備が始まった。標識は直進表示が二箇所、矩折方向が二箇所計四カ所。柱は桧4寸角、文字版は桧一寸五分板で加工し、階段箇所には仮設用のステップを発注した。当日は遠方から参加してくれた武村さんを含めて、十六人が参加してくれた。

さっそく、高谷山方面の笹刈隊と旧道整備隊の2班に分かれて行動開始となった。それぞれの体力や個性を考慮して分かれてもらったのは言うまでもない。賑やかに笹刈隊を送り出し、夜叉神駐車場直下の標柱設置と階段ステップの取り付けが始まった。二つの標柱を約七十〜八十cm埋込み、ビクともしない様に固定させるのはたいへんな事だ。元電設関係の監督経験者、岩佐さんの指揮のもとひたすら穴を掘る。

道標の素材は腐食に強いことから栗の木が使われていたが、昨今は品薄から高価になってしまい、なかなか使えない。しかし、栗沢山の山頂や櫛形山系唐松岳山頂の標識は十年以上も経つが今でも記念写真の後でしっかりと立っている。スコップの丈ほどもある穴が掘り終わると、埋設前に防腐剤（キシラデコール）を丁寧に塗って建て込む。勿論方向を再確認し周りの土を締め固めて、文字版を塗れば完成。残り三箇所の設置と赤布表示に向けて標識隊は下って行った。階段隊では山小屋管理人の若者二人が悪戦苦闘している。基本的には親パイプにステップを等間隔で取り付けていく作業だが、慣れないとなかなか段取りが難しい。昨今の山小屋経営には登山客のサービスや食事に気を使うことが要求される反面、登山道整備や外仕事の機会もままならないのかもしれない。しかし、小屋番はオイルマイティだからこそ、訪れる人々に信頼され、尊敬される。このことは今も昔も変わる事はない。付き添いの二人の中高齢者は若者に「経験」を惜しみなく捧げていた。

思ったよりたいへんだった笹刈隊は下の作業が終わる頃、まだ一時間ほどのもがらばってくれたようだ。携帯電話での話しも息が弾んでいて体力の消耗度も半端ではない様子、そこですかさず黄色い声で「モシモシ、タイヘンデショウケド、ガンバッテエー」の応援。天気が良く、眺望が良かったことであって出来るだけ高い処に居たかった？のかも知れない。「初対面の皆様でしたが、売秋や温泉」話で盛り上がった。



何事も経験です！

て、肉体疲労以上の元気をいただいで帰ってきました。遠く悪沢岳・赤石岳までのぞむことが出来て、これまたけつこう感動しました。再度機会を見つけてお伺いしたいと思えます。しっかりと働きますのでよろしくお願いたします。」武村さんの感想でした。ゆっくりお礼もいえませんでした。ありがとうございます。暮から正月の間、夜叉神峠までの林道が凍結の為車輻通行止めになった。

冬山を計画していた人達はここへ（山の神ゲート）着てから通行止めを知り、困惑する。

「こんなときには旧道を使ってください」山岳館や事務局「らんたん」では略図の配布や説明に何度か働いてくれたようでした。歩いてくださいと胸を張って見えるのも整備した自信があつてからこそです。皆さんお疲れさまでした。水道管の布設替が終われば道はもっと歩き易くなります。大いに四季の里山を楽しんでください。



檜形山アヤマ保全対策調査検討会

報告その一

檜形山のアヤマがなぜ減少したのか、その主たる要因を探るため、南アルプス市農林商工部みどり自然課が中心となって、第一回目の検討会が十月十七日、午後、南アルプス市役所で行われました。

私も芦安ファンクラブの代表として出席しました。植物、動物などを研究している先生方、関係行政機関、県循環型会社推進課、地域自然関係団体と計八名が委嘱されました。観光商工課の職員が六月に現地確認を行った時の経過報告をも見て昨年からのアヤマの開花数が激減し、本年も同様にほとんど開花が期待できない状況であることを知りました。

「檜形山のアヤマ」八十六年によると、数は全体で二千八百三十万本、花の数三百二十万個咲いていた様です。なぜ減少したのか植生調査を実施する事になりました。実施日は十一月十日(土)に行う事になりました。今回の調査はどうして咲かなくなってしまったのか、その要因を探るために事前準備として調査区域を設置する作業を行いました。

当日は、あいにくにも雨、午前七時市役所に集合、県道伊奈ヶ湖線からさくら池、水室神社と丸山林道を通り途中を右折池の茶屋林道を行く、未舗装で、でこぼこ道、晴れている時は左手に白根三山や南アルプス南部の山々を見渡せる場所もあるそうです。

林道終点が登山口、広い駐車スペースとトイレ、休憩室がある建物がありました。建物の左手から登り始める、山腹の南斜面を行くとわずかで尾根に出る、尾根は防火帯になっていて防火帯を北に向かって

登る。頂上近くにはダケカンバやツガの大きき並び右はカラマツの植林地、山頂で少し休み、裸山へと行く、裸山へ九時四十五分に着きました。小雨の中の作業になりました。



裸山の調査区域は二十m×十mのサブリガードネットの設置、支柱は二・五mおきに設置、支柱とネットを結束バンドで固定し、ネットの上部にロープを通し、ネットの下部にもロープを通しストッパーで下部は埋め込み固定し出入り口のドアを設置しました。

作業と同時に二十m×十mの中のシカのフンの数を調査しました。約二千粒あったそうです。

裸山の作業を終え、次にアヤマ平に向かいました。アヤマ平では五×五mと十×五mの保護区域の設置作業でした。小雨模様だったので、昼食の時間を少し遅らせ作業をしました。

十二時三十分作業終了、昼食を食べ下山しました。今回の作業が来年の調査に役立って欲しいと思います。作業には登山教室で講師をお願いした三宅八郎先生も同行していただき、アヤマの地下茎の露出の調査をした方が良いのではないかと意見もいただき、貴重なお話を聞くことができました。三宅先生ご苦勞様でした。これからは多くの人達に檜形山に登ってもらい今の裸山、アヤマ平を見ていただき、これから何をしたらアヤマが咲くのか意見を聞き、来年アヤマが咲くことを願います。来年春、調査区域の下草刈りも行います。多くの人の参加をお願いいたします。今回の作業に参加して下さった皆様やファンクラブの会員には雨の中の作業、ご苦勞様でした。

芦安ファンクラブ  
依田正記



冬日和

昨年の冬は比較的雪が少なかった為に林道南アルプス線の陽だまりでカモシカやホンジカを見かける機会も多く、毎回撮影できる事が楽しかった。しかし今冬はすでに数回の降雪があり、道沿いは真っ白が解けず、山も谷も厳冬に包まれている。仕事柄、降雪後の状況を確認する為に入ることが多く、随道を抜けて真っ白い峰々をまばゆく仰ぐときは毎回感動を抑えられない。

露光を足元に合わせると無数の獣たちの足跡が縦横無尽に、且つ思い思いに描かれている。殆どが4WDの彼らは思ったより足跡が浮いている。急に気配を感じたり、方向転換の時だけ、強く蹴る為に沈んでいる。小さくはリヌから大きくはカモシカの足跡まで様々な爪や肉球が次の雪まで写されている。殆どが単独で行動しているが、群れで移動しているホンジカのそれは明らかに道になってしまい、昨年良く見かけた所は下草を食い尽くされてしまった地肌が早く雪を溶かしている。姿を見つけていると、どっこい今年はその先の尾根に移動していた。広河原以奥はさすがにカモシカが大きく行動している。古い足跡、新しい足跡の時間が感じられる。その昔カモシカにラッセル泥棒された事を思い出した。



クラフトした雪面に浮き上がるカモシカの足跡



初めての北アルプスは

大キレット越え

山を始めて四年である。まだ北アルプスへは行ったことがない。山梨県のほぼ中央に位置する所に住んでいるため目の前に山がある。「南アルプスの麓に居るのだもの、先ずは地元からご挨拶に行かねば！」と、もっぱら周辺の山々を歩いている。

二年前にNPO法人芦安ファンクラブが協賛するキタダケソウ観察会があることを知り参加した。お陰様で北岳へ登ることが出来、念願だったキタダケソウも見ることが出来た。あの時の感動は今でも忘れることが出来ない。そんな縁でファンクラブに入会した。するとそこにはベテランたちが勢揃いしていた。ベテランたちが話してくれる山々、行きたいと思いつけている山のことなど指をくわえて聞いていた。実力がないのだから仕方がないのだが「いつか、私も！」と秘めたる思いを灯し続けた。

そんな私に北アルプスの槍ヶ岳から穂高岳へ縦走するという柵から牡丹餅の夢のような話が舞い込んだ。ただ・大キレットを越えるという。大キレットという言葉に躊躇した。キレット→岩場→ロープ→鶏冠山と、連想ゲームが始まる。ベテランに不安を話すと「大丈夫ですよ。三十mのロープを持っていきますから。」つまり三十mなら落ちても助けてくれるという何とも心強い？返事が返ってきた。

一日目

新穂高温泉側の駐車場から出発する。空気が冷たく心地よい。今日は槍ヶ岳山荘泊なので、滝谷出合の辺りまで小気味よいペースで進む。歩く人も少なく静か

である。が、突然大勢の人が休憩する沢に出た。そこから学生のグループと一緒に。彼らは早足なのだが小刻みに休憩を取る。さながら特急列車の各駅停車と云ったところか。私たちは各駅停車よりさらに遅いスピードではあったが、休まずに進んだ。飛騨乗越をやっとの思いで登り切り尾根に出る。夢にまで見た大槍が目前に迫っていた。



二日目

朝のうちは大槍が見えていたものの次第にガスが湧き視界が悪くなる。いつの間にか大喰岳を通過していた。ほどなくして南岳に着く。いよいよ大キレット越えである。万が一のため登攀ベルトを着用する。取り付いてすぐの大下りは浮き石に注意しながら慎重に下る。危険な箇所はベテランが声をかけてくれる。集中と緊張の連続である。最後に長い鉄梯子

を二つ降りたら最低鞍部に着く。鉄梯子は長い年月の間の落石等で下に進むにつれ歪んでいて、落石の凄さを物語っている。その鉄梯子も今は新しい物と交換され役目を果たした以前のもは南岳小屋にその一部が展示されているという。

登山道はやや平坦になるが気は抜けないう。「長谷川ピークはまだか・まだなのか？」と、ピリピリしながら歩く。「さあ、これから登りですよ。」の声に我に返る。来た道を振り返ればいつの間にか長谷川ピークを通り過ぎていた。「やれやれ。」と胸を撫で下ろしたのは束の間で、この登りにも苦しめられる。登りながら「南岳側から良かったあ、この高度感逆からだったら本当に泣くヨ。」と何度思ったことか。やっこのことで北穂高小屋に着いた時は大キレットを越えたという安堵感で緊張の糸が緩んだ。それがいけなかった。次の北穂から涸沢岳への道はさらに厳しかった。緊張の糸がブツンしてしまった上に疲労も重なり、この登山道こそ涸沢泣きとでも名付けたいくらいだった。ガスのわずかの晴れ間に穂高岳山荘が見えた時は小躍りして喜んだ。

勿論このテラスでもビールで乾杯したのは言うまでもない。

三日目

計画では奥穂高岳へ行ったあと新穂高温泉側に帰る予定だったが、仲間の一人の前穂高岳を経て帰りたいという思いに諸手をあげて賛成した。せっかく日本の高山第五位、十位、十二位、十七位、九位、八位、三位と歩いてきたのにあと一位だけを残して帰るのは何とも勿体ない。

二日間頑張ってきたご褒美は、これでもか！とばかりに見事なまでの快晴である。前穂高岳山頂で昨日歩いてきた道のりを確認し、の風景を存分に堪能して至福のひと時を過ごす。

さあ、これからは帰り道、最後まで怪我のないようにと再度気を引き締める。重太郎新道上の平らな石の上で一休み。三日目の休憩時に食べよう！と持ち続けていたミカン等を皆で分けて喉を潤す。おいしかったあ。

帰ってきた上高地は都会の様相である。子供連れもいればカップルもいる。老若男女の人混みである。そう言えばベテランの一人が「山から下りてきて上高地に着くと白粉の香りが鼻をくすぐる。」と言っていたが、嘘ではなさそうだ。無理やり現実の世界に引き戻され、戸惑いながら見上げた穂高岳の山間ではもうすでに別のドラマが展開しているのだろうか。仲間の一人一人と感謝を込めて固い握手を交わし、初めての北アルプスに別れを告げた。

芦安ファンクラブ 花輪 記

